

平成30年度購入文化財一覧

【東京国立博物館】(計31件)

- 1 ○種 別 絵画
○名 称 山水図押絵貼屏風 (さんすいずおしえぱりびょうぶ)
○指 定 重要美術品
○作 者 等 久隅守景 (生没年不詳) 筆
○時 代 江戸時代・17世紀
○品 質 紙本墨画淡彩
○員 数 6曲1双
○寸 法 等 本紙 各縦100.3cm 横41.9cm / 総寸 各隻 縦161.0cm
横364.0cm



○作品概要 紙本金地押絵貼、絹本墨画淡彩。屏風装。各扇に1図ずつ山水図を配した押絵貼屏風である。各図は対角線を意識した構図を取り、画面上部三分の一ほどを余白として残す。その画風は夏珪あるいはそれを学習した雪舟、狩野元信などの室町水墨画の表現を継承しており、元信印山水図押絵貼屏風（フリア美術館蔵）などの作例が本図の前提にあったと考えられる。本作の類例として、もともと屏風に貼られていた紙本の山水図（東京国立博物館、メトロポリタン美術館他分蔵）があるが、本屏風は12図全てがまとまって伝来しており、重要である。大画面形式の障壁画を除き、小画面の作例に絞って守景の山水図を見ると、本屏風は守景山水図の代表作として高く評価される。

○購入金額 32,400,000円

- 2 ○種 別 書跡
○名 称 和歌屏風 (わかびょうぶ)
○時 代 安土桃山～江戸時代・16～17世紀
○品 質 彩箋墨書
○員 数 6曲1隻
○寸 法 等 縦146.7cm 横340.7cm



○作品概要 屏風装。六曲一隻。金泥で雲が描かれた料紙に、藤原家隆作の和歌25首が散らし書きされている。筆者の伝称はないものの、近衛信尹が揮毫した可能性が高いものである。万葉仮名（漢字）部分は、定家流を学んだとされる近衛信尹の書の特徴をとくによく表している。（万葉仮名を使うのも信尹の書の特徴の一つでもある）。仮名部分は「あ」「は」「み」「む」など近衛流（三藐院流）の特徴が顕著な文字もあるものの、全体としては近衛流の形成途中の時期を示している。「な」の最終画を横長の楕円形で書くことが、近衛流が確立して以降の特徴のひとつとして考えられるが、本屏風の「な」にはその特徴がみられない。年号の明らかな信尹の筆跡で確認すると、本屏風は、信尹が薩摩配流を許されて帰洛した慶長元年以降（信尹30代＊信尹が定家流の書風となったのも帰洛の頃）より信尹40代前半までに制作されたものと推測する。さらに言うならば、本屏風にみられる、少し右肩上がりで篇平な、左にはらう肉太の線と右にはらう細い筆線のバランスは、慶長3年（1598年、信輔34歳）頃制作の「総目録」（B-2865「調度手本」のうち）に近似している。本屏風には、藤原家隆が詠んだ「為家卿家百首」より「恋二十五」の部の25首すべてが書写されている。「為家卿家百首」は、藤原（九条）基家が編纂した藤原家隆の家集『壬二集（みにしゅう）（または玉吟集）』（巻中）に収められている。近衛信尹の自筆日記『三藐院記』慶長四年分（一冊）の表紙の信尹自身による加筆により、『壬二集』を、信尹が所蔵していたことが確認できた。近衛流（三藐院流）を継承するのは、養嗣子である信尋（後陽成天皇第四皇子、1599～1649）をはじめ、和久半左衛門（1578～1638）から鷹司教平（1609～68）まで約20名の名前があげられている（「本朝古今名公古筆書流」『万宝全書』元禄7年〔1694〕）。とくに信尋の書は、信尹の書と見分けがつかないともいわれるが、信尋真筆の書と比較したところ、とくに漢字部分が、信尹の漢字よりも洗練されていた。本屏風は、漢字部分に信尹の書の特徴がよく表れている上に、近衛流が未開花の状態にもかかわらず様式化していない良さがあることから、真似や模写ではなしえないものである。

○購入金額 8,640,000円

- 3 ○種 別 彫刻
 ○名 称 能面 増女（のうめん ぞうおんな）
 ○時 代 室町～安土桃山時代・16世紀
 ○品 質 木造、彩色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 縦21.1cm 幅13.2cm 奥行6.8cm
 ○作品概要 若い女の面。やや冷たい表情で品位の高さを感じさせる。天女や女神の役に用いられる。髪際のおくれ毛が、中央から高眉辺まで2本、つぎに斜めに3本、その下は内側に太い毛1本、外側に細い毛2本をあらわす。広葉樹材でやや重い。面裏は鑿の稜線を少し磨いてから茶色の透漆を塗る。



○購入金額 10,000,000円

- 4 ○種 別 染織
 ○名 称 上衣・括袴 萌黄地向獅子丸龍卍蜀江文模様錦（じょうい・くくりばかま もえぎじむかいじしがんりゅうまんじしゅっこうもんもようにしき）



○時 代 江戸時代・17～18世紀
 ○品 質 絹、表地：錦、裏地：白練緯
 ○員 数 1具

○寸 法 等 上衣：丈103.0cm、肩幅66.4cm、袖幅47.5cm/括袴：丈90.0cm、前腰幅36.0cm、後腰幅31.2cm

○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。本品は、中国風の蜀江文の様式をとりながら、沢瀉、蜻蛉など尚武を願う武家好みの模様、蜂須賀家の家紋である卍を織り出した和製の錦である。一見、鎧直垂に見えるが、腰紐が共裂である他、衿の形式が通常と異なるため、鎧直垂ではない。両肩・両袖に肩上げのための雷文金具が付く。袖括に紫丸組紐を一条通すほか、細手の紫丸組紐による上刺し、紺白橙の綾に組んだ細紐を袖口周囲にとめる。また、袖・衿・裾は紫地金糸経浮織で縁取られる。袴の腰紐前部分に「叶」升目、清明紋、後部分に「大」の文字が白燃糸で縫われる。上衣に「操山様」「ち印／ニツノ内」、袴に「綱矩様」「ち印／ニツノ内」の紙縫り札が付く。第5代藩主蜂須賀綱矩（1661～1730）所用と伝わった装束である。

○購入金額 7,236,842円

- 5 ○種 別 染織
 ○名 称 袖無革羽織 白地薬玉模様（そでなしかわばおり しろじくすだまもよう）



○時 代 江戸時代・18～19世紀
 ○品 質 染革、描絵
 ○員 数 1領
 ○寸 法 等 丈99.0cm、肩幅57.0cm

○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。単仕立の袖無の革羽織である。一方を白くさらし、もう一方を紅色に染めたなめし革の白い方に端午の節供にちなんだ薬玉模様を描絵で表わす。衿には青緑地唐花唐草模様繻珍の掛衿が付く。胸の部分に羅紗で牡丹をかたどった留め具がつく。背切り込み、袖縁の部分に白地石畳文錦の縁取りが付く。「う印」の紙縫り札が付く。

○購入金額 1,628,289円

- 6 ○種 別 染織
○名 称 袖無革羽織 紅地竹雀図（そでなしかわばおり ベにじたけに
すずめず）
○時 代 江戸時代・18～19世紀
○品 質 染革、描絵
○員 数 1領
○寸 法 等 丈98.2cm、肩幅56.2cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。単仕立の袖無の革羽織である。一方を白くさらし、もう一方を紅色に染めたなめし革の紅色の方に竹雀図を描く。衿には白地牡丹唐草模様繻珍の掛衿が付く。胸の部分に羅紗に丸に卍紋の入った釦が付いた留め具が付く。背切り込み、袖縁の部分に紅地石畳文錦の縁取りが付く。



○購入金額 1,521,382円

- 7 ○種 別 染織
○名 称 革羽織 白地牡丹孔雀図（かわばおり しろじぼたんくじゃく
ず）
○時 代 江戸時代・18～19世紀
○品 質 革、描絵
○員 数 1領
○寸 法 等 丈97.0cm、肩幅62.2cm、袖幅30.8cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。袷仕立の革羽織である。白くさらしたなめし革に雌雄の孔雀と牡丹の図を描く。衿には黒ビロード地の掛衿が付く。袖口、背切り込み、裾周りに黒地石畳文錦の縁取りが付く。



○購入金額 1,850,329円

- 8 ○種 別 染織
○名 称 肩当 紅地葵破花菱亀甲模様（かたあて ベにじあおいやぶれは
なびしきっこうもよう）
○時 代 江戸時代・18～19世紀
○品 質 絹、表地：繻珍、裏地：紅縮緬、縁：縮緬
○員 数 1領
○寸 法 等 丈14.6cm、総幅129.3cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。水浅葱・白・紅・黄・紫の五段の髪飾りをつけた華やかな肩当。腕先下部は割れ、紫丸打紐のツガリでつなぐ。胸前を留める釦には丸に卍紋が入る。「ゆ印」の紙縫り札が付く。



○購入金額 888,158円

- 9 ○種 別 染織
○名 称 弓籠手 紺地雲龍模様（ゆごて こんじゅうりゅうもよう）
○時 代 江戸時代・18～19世紀
○品 質 絹、表地：錦、裏地：萌黄平絹
○員 数 1対



- 寸法等 丈 26.6cm、総幅 77.0cm
- 作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。弓籠手とは、弓矢を射る際に両腕あるいは弓手に着ける籠手である。四爪の龍と五彩の雲を織り出した中国製の錦で馬蹄袖に仕立てた弓籠手。萌黄平絹の裏地がつく。紫丸組紐の懸緒、袖口に手首の緒がつけられ、手首の緒には象牙の留め具がつく。筒の口には紺地経浮織の縁取りがある。「於印」の紙縫り札が付く。
- 購入金額 863,487円

- 10 ○種別 染織
- 名称 弓籠手 金地雲牡丹山茶花瑞鳥模様（ゆごて きんじくもぼたん さざんかずいちょうもよう）
- 時代 江戸時代・18～19世紀
- 品質 絹、表地：綴織、裏地：萌黄平絹
- 員数 1具
- 寸法等 丈52.5cm 総幅69.0cm
- 作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。弓籠手とは、弓矢を射る際に両腕あるいは弓手に着ける籠手である。地の部分の緯糸に撚金糸を全面に織入れ、色彩鮮やかな色糸で、鳳凰、鶴、雉、牡丹、山茶花、霊芝、宝珠、福山壽壽文といった中国の吉祥模様を尽くした綴織で仕立てる。綴織の一部に孔雀羽が織り入れられていることや模様の特徴などから、中国産の緯糸であろう。裏地は萌黄平絹である。袖と胴をつなぐ部分には緑・白・紅・浅葱・紫の五色の撚糸で飾る。また、袖口、胴部の縁取りは、紺の経浮織による。手の甲にあたる部分に紺革の台に紫紐で中指懸の緒をつける。「く印」「五拾参」の紙縫り札がつく。



- 購入金額 740,132円
- 11 ○種別 染織
- 名称 弓籠手 黒天鷲絨地稲丸花丸模様（ゆごて くらびろーどじいね のまるはなのまるもよう）
- 時代 江戸時代・18～19世紀
- 品質 絹、表地：紋天鷲絨、裏地：紅縹子
- 員数 1具
- 寸法等 丈 53.2cm、総幅 67.4cm
- 作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。弓籠手とは、弓矢を射る際に両腕あるいは弓手に着ける籠手である。撚金糸で花の丸模様と蜂須賀家の替紋である稲穂丸紋と撫子丸を組み合わせた模様を織り出した天鷲絨で仕立てられる。裏地は紅縹子である。花の丸模様には芭蕉・桔梗・躑躅・朝顔などがみられる。袖口、胴部の縁取りは、白地石畳模様錦による。手の甲にあたる部分に紺革の台に紫紐で中指懸の緒をつける。「さ印」の紙縫り札がつく。



- 購入金額 600,329円

- 12 ○種別 染織
- 名称 弓籠手 紅地桜折枝模様（ゆごて べにじさくらおりえだもよう）
- 時代 江戸時代・18～19世紀
- 品質 絹、表地：縹珍、裏地：焦茶平絹



- 員 数 1 具
 ○寸 法 等 丈 51.7cm、総幅 66.0cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。弓籠手とは、弓矢を射る際に両腕あるいは弓手に着ける籠手である。桜折枝模様を織り出した繻珍を仕立てる。裏地は焦茶平絹である。袖口、胴部の縁取りは、焦茶経糸浮織による。手の甲にあたる部分に紺革の台に紫紐で中指懸の緒をつける。胸の懸緒には爪形菖蒲草が用いられる。
- 購入金額 649,671 円

- 13 ○種 別 染織
 ○名 称 胴着 黄色地鳥蝶模様（どうぎ きいろじとりちょうもよう）
 ○時 代 江戸時代・18～19 世紀
 ○品 質 表地：染革、描絵、裏地：青緑平絹
 ○員 数 1 領
 ○寸 法 等 丈 100.0cm、肩幅 64.7cm、袖幅 31.2cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。縹色を用いて、蝶と笹に見立てた鳥を組み合わせた模様を描絵で表わす。壺袖に衽付きの垂領仕立。裏地には青緑平絹を用いる。「む印」の紙縫り札が付く。
- 購入金額 1,315,789 円



- 14 ○種 別 染織
 ○名 称 胴着 紫地松蔦図（どうぎ むらさきじまつたず）
 ○時 代 江戸時代・18～19 世紀
 ○品 質 表地：染革、描絵、裏地：青緑平絹
 ○員 数 1 領
 ○寸 法 等 丈 100.3cm、64.2cm、幅 33.5cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。紫に染めたなめし革に蔦が垂れかかる老松の図を描く。青緑平絹の裏地がつく。壺袖に衽がついた垂領仕立。「ね印」「五拾」の紙縫り札が付く。
- 購入金額 1,546,053 円



- 15 ○種 別 染織
 ○名 称 胴着 白地扇面散図（どうぎ しろじせんめんず）
 ○時 代 江戸時代・18～19 世紀
 ○品 質 表地：革、描絵、裏地：青緑平絹
 ○員 数 1 領
 ○寸 法 等 丈 96.0cm、肩幅 68.5cm、袖幅 29.8cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。前面に朝顔、獅子、菖蒲に百合、群鳥、美女図、墨竹図を描いた扇面、背面に沢瀉に雀、菊、秋草、波に入日を描いた扇面を散らした図が描かれる。裏地には青緑平絹を用いる。壺袖に衽がついた垂領仕立。「ら印」の紙縫り札が付く。



○購入金額 1,356,908 円

- 16 ○種 別 染織
○名 称 胴着 紅地雲龍模様（どうぎ べにじうんりゅうもよう）
○時 代 江戸時代・18～19 世紀
○品 質 絹、表地：繻珍，裏地：青緑平絹
○員 数 1 領

○寸 法 等 丈 102.5cm、肩幅 60.7cm、袖幅 31.5cm

○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。平金糸、撚金糸を織り交ぜた雲龍模様の繻珍を用いて仕立てる。裏地は青緑平絹を用いる。壺袖に衽がついた垂領仕立。「ま印」の紙縫り札が付く。



○購入金額 1,217,105 円

- 17 ○種 別 染織
○名 称 胴着 紅地芙蓉法相華唐草模様（どうぎ べにじふようほうそうげからくさもよう）
○時 代 江戸時代・18～19 世紀
○品 質 絹、表地：繻珍，裏地：青緑平絹
○員 数 1 領

○寸 法 等 丈 103.0cm、肩幅 63.0cm、袖幅 32.3cm

○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。花唐草模様の繻珍を用いて仕立てる。裏地には青緑平絹を用いる。壺袖に衽がついた垂領仕立。「や印」「五拾一」の紙縫り札が付く。



○購入金額 1,217,105 円

- 18 ○種 別 染織
○名 称 胴着 紅地円窓団扇地紙羽根模様（どうぎ べにじえんそううちわじがみはねもよう）
○時 代 江戸時代・18～19 世紀
○品 質 絹、表地：錦，裏地：青緑平絹
○員 数 1 領

○寸 法 等 丈 102.0cm、肩幅 63.0cm、袖幅 32.0cm

○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。繻子地に円窓、団扇、地紙の模様と、羽子板の羽根の模様を散らした模様を金銀糸を通して織り出した錦で仕立てる。裏地は青緑平絹を用いる。壺袖に衽がついた垂領仕立。「け印」の紙縫り札が付く。



○購入金額 1,036,184 円

- 19 ○種 別 染織
○名 称 裁着袴 縹地橘樹垣図（たっつけばかま はなだじきつじゅかきず）
○時 代 江戸時代・18～19 世紀
○品 質 染革、描絵
○員 数 1 腰
○寸 法 等 丈 112.0cm、腰幅前 25.0cm、袴腰幅 23.0cm、袴腰高 7.5cm

○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。裁着袴とは、膝から下の部分を細く仕立てて、活動しやすいようにした袴である。江戸時代中期頃より着用されるようになり、武士の旅装や武士道の訓練、奉公人の作業着や行商人の衣服として用いられた。表を縹色に裏を紅色に染めた革に橘の立木を片足ずつ、前面、背面に計4本描く。立木の根元から下には籠目状に垣を描く。また、袴腰には橘の折枝を描く。脚絆のふくらはぎ部分には切り込みがあり、紺地牡丹唐草文様金襴で縁取り、紫染革の紐が上下に1本ずつ付く。また、切り込み部分には、象牙に黒漆塗りの釦を各3つずつとめる。腰紐も共革である。腰紐に「の印」「五十五」と書かれた紙縫り札がつく。



○購入金額 1,274,671円

20 ○種 別 染織
○名 称 裁着袴 白地檜梅図（たっつけばかま しろじやりうめず）
○時 代 江戸時代・18～19世紀
○品 質 染革、描絵
○員 数 1腰
○寸 法 等 丈105.7cm、腰幅前26.3cm、袴腰幅23.5cm、袴腰高8.3cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。裁着袴とは、膝から下の部分を細く仕立てて、活動しやすいようにした袴である。江戸時代中期頃より着用されるようになり、武士の旅装や武士道の訓練、奉公人の作業着や行商人の衣服として用いられた。裏を紅色に染めた革に梅の枝を足元から直立させた檜梅図を描く。脚絆部分は縹色に染めた革に紅と紺の縞で山道模様を描き、その間に唐草模様を描く。ひざ下に黄染革の紐を上刺しする。ふくらはぎ部分には切り込みがあり、萌黄地綾金襴で縁取る。また、象牙に黒漆塗りの釦をつける。腰紐も袴と共革である。腰紐に「ぬ印」と書かれた紙縫り札がつく。



○購入金額 1,192,434円

21 ○種 別 染織
○名 称 平袴 紅地胡蝶模様（ひらばかま べにじこちょうもよう）
○時 代 江戸時代・18～19世紀
○品 質 絹、精好地縫取織
○員 数 1腰
○寸 法 等 丈97.0cm、腰幅前29.7cm、袴腰幅25.7cm、袴腰高8.6cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。平袴とは長袴に対し、裾が踝の上で切られている短い袴のことである。半袴、切袴、小袴とも称する。経糸が細く、緯糸が太い精好地に縫取織で蝶模様を表わした袴。腰紐は共裂である。腰紐に「こ印」の紙縫り札がつく。



○購入金額 682,566円

- 22 ○種 別 染織
 ○名 称 野袴 縹地流水桜模様（のばかま はなだじりゅうすいさくらもよう）
 ○時 代 江戸時代・18～19世紀
 ○品 質 絹、表地：繻珍，裏地：繻子，裾：縮緬
 ○員 数 1腰
 ○寸 法 等 丈96.5cm、腰幅前26.4cm、袴腰幅25.7cm、袴腰高8.2cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。野袴とは、武士が旅や乗馬の際に着用する切袴丈の袴である。経済力や身分に応じて、錦や緞子など華やかな織物で仕立てられ、裾にビロードや縮緬などで縁を付ける。縹繻子地に流水に桜模様を散らした繻珍で袴を仕立て、紅繻子の裏地が付く袷仕立てである。裾には紫縮緬の縁がつく。袴腰の中央に白い糸で蜂須賀家の家紋である「丸卍紋」が織り出される。腰紐は共裂である。腰紐に「江印」と書かれた紙縫り札がつく。
- 購入金額 723,684円
- 23 ○種 別 染織
 ○名 称 野袴 浅葱地流水桜模様（のばかま あさぎじりゅうすいさくらもよう）
 ○時 代 江戸時代・18～19世紀
 ○品 質 絹、表地：繻珍，裏地：繻子，裾：縮緬
 ○員 数 1腰
 ○寸 法 等 丈99.0cm、腰幅前27.2cm、袴腰幅25.8cm、袴腰高8.4cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。野袴とは、武士が旅や乗馬の際に着用する切袴丈の袴である。経済力や身分に応じて、錦や緞子など華やかな織物で仕立てられ、裾にビロードや縮緬などで縁を付ける。浅葱繻子地に流水に桜模様を散らした繻珍で袴を仕立て、裏地に紅繻子を用いた袷仕立てである。裾には紫縮緬の縁がつく。袴腰の中央に白い糸で蜂須賀家の家紋である「丸卍紋」が織り出される。また、前腰の裏面中央に腰篋がつく。腰紐は共裂である。腰紐に「て印」と書かれた紙縫り札がつく。
- 購入金額 707,237円
- 24 ○種 別 染織
 ○名 称 野袴 水浅葱地観世水紅葉模様（のばかま みずあさぎじかんぜみずもみじもよう）
 ○時 代 江戸時代・18～19世紀
 ○品 質 絹、表地：綾地錦，裏地：繻子，裾：縮緬
 ○員 数 1腰
 ○寸 法 等 丈94.3cm、前腰幅29.4cm、袴腰幅25.7cm、袴腰高8.7cm
 ○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して23件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏝馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。野袴とは、武士が旅や乗馬の際に着用する切袴丈の袴である。経済力や身分に応じて、錦や緞子など華やかな織物で仕立てられ、裾にビロードや縮緬などで縁を付ける。綾地に観世水に紅葉が流れるいわゆる「龍田川」模様を表わした錦で袴を仕立て、裏地に紅繻子を用いた袷仕立てである。裾には紫縮緬の縁がつく。腰紐は共裂である。腰紐に「を印」「四拾八」と書かれ



○購入金額 600,329 円

- 25 ○種 別 染織
○名 称 野袴 藤色地流水紅葉模様（のばかま ふじいろじりゅうすいもみじもよう）
○時 代 江戸時代・18～19 世紀
○品 質 絹、表地：繻珍，裏地：繻子，裾：縮緬
○員 数 1 腰
○寸 法 等 丈 100.0cm、腰幅前 28.0cm、袴腰幅 23.2cm、袴腰高 8.5cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管



されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。野袴とは、武士が旅や乗馬の際に着用する切袴丈の袴である。経済力や身分に応じて、錦や緞子など華やかな織物で仕立てられ、裾にビロードや縮緬などで縁を付ける。藤色繻子地に流水に紅葉のいわゆる「龍田川」模様を散らした繻珍で袴を仕立て、裏地に紅繻子を用いた袷仕立である。裾には紫縮緬の縁がつく。袴腰の中央に白い糸で蜂須賀家の家紋である「丸卍紋」が織り出される。腰紐は共裂である。腰紐に「る印」と書かれた紙縫り札がつく。

○購入金額 575,658 円

- 26 ○種 別 染織
○名 称 野袴 紅地笹立涌模様（のばかま べにじさたてわくもよう）
○時 代 江戸時代・18～19 世紀
○品 質 絹、表地：繻珍，裏地：繻子，裾：縮緬
○員 数 1 腰
○寸 法 等 丈 94.5cm、腰幅前 30.6cm、袴腰幅 27.7cm、袴腰幅 9.1cm
○作品概要 「阿州」「厩方」の朱書および卍紋の入った黒漆塗の長持の中に保管



されていたことから、徳島藩蜂須賀家伝来であることが知られる。厩方で一括して 23 件の装束が保管されていたこと、また、稀に見る華やかな装束がそろっていることから、「犬追物」「流鏑馬」「打毬」「鷹狩」といった伝統行事のために特別に誂えられた可能性がある。野袴とは、武士が旅や乗馬の際に着用する切袴丈の袴である。経済力や身分に応じて、錦や緞子など華やかな織物で仕立てられ、裾にビロードや縮緬などで縁を付ける。紅繻子地に紺糸で立涌模様を、金糸で笹模様を織り出したいわゆる繻珍で袴を仕立て、裏地に萌黄繻子を用いた袷仕立である。裾には紫縮緬の縁がつく。袴腰の中央に金糸で蜂須賀家の替紋である「稲穂丸紋」が織り出される。腰紐は共裂である。腰紐に「あ印」「六拾」と書かれた紙縫り札がつく。

○購入金額 575,658 円

- 27 ○種 別 考古
○名 称 石室寺経塚出土品（銅製経筒）（いしむろでらきょうづかしゅつどひん（どうせいきょうづつ））
○時 代 平安時代・大治元年（1126）
○品 質 銅製
○員 数 1 合
○寸 法 等 総高 32.0cm 最大径 19.0cm 底径 16.5cm
○作品概要 銅製経筒：鑄造。宝珠形のつまみを有する被せ蓋と円筒状の筒身からなる。筒身にほぼ全



周にわたり蹴彫による箴字で銘文が認められる。蓋の上面には本作品を覆っていたと考えられる甕の小破片が付着するほか、筒身下半および底部には経塚造営時に充填されたと考えられる木炭片が付着している。銘文「日本國遠江國／石室寺／如法經／大治元年丙午十二月廿一日壬午／奉埋之／目代 散位藤原舒貞／散位平康親／勸進僧聖禪／鑄師／時貞／紀武方」

○購入金額 14,529,148 円

- 28 ○種 別 考古
○名 称 石室寺経塚出土品（甕）（いしむろでらきょうづかしゅつどひん（かめ））
○時 代 平安時代・大治元年（1126）
○品 質 陶製
○員 数 1 口
○寸 法 等 高 33.5cm 最大径 34cm 底径 18cm
○作品概要 甕（外容器）：渥美窯産に比定。外に肥厚する口唇から短頸を経て胴上方で膨らむ。頸から胴部にかけて灰釉が斜めに流れ渥美窯に特徴的な白色粘土の器肌と相まって緑色の装飾を高めている。胴部には成形時に施された叩きによる格子目状の叩き痕が残されているほか、焼成時に付着した窯の壁体の一部が認められる。内面の底部付近には筋状に銅錆が認められるが、これは経筒を甕がさかさまの状態覆っていたとされる発見時の状態を示していると考えられる。
- 購入金額 4,573,991 円
- 
- 29 ○種 別 考古
○名 称 石室寺経塚出土品（白磁合子）（いしむろでらきょうづかしゅつどひん（はくじごうす））
○時 代 平安時代・大治元年（1126）〔中国・北宋～南宋時代（12 世紀）〕
○品 質 白磁製
○員 数 1 合
○寸 法 等 総高 4.3cm 最大径 7.6cm 底径 6.2cm
○作品概要 白磁合子：型抜きで作られた白磁製合子。蓋と身からなる。身には 3 本の蓮茎の間に小坏が付されている。
- 購入金額 896,861 円
- 
- 30 ○種 別 歴史資料
○名 称 簠齋藏封泥拓本冊（ほさいぞうふうでいたくほんさつ）
○時 代 清時代～中華民国（19～20 世紀）
○品 質 紙本墨拓貼り込み冊
○員 数 6 冊
○寸 法 等 縦 32.8cm 横 22.0cm
○作品概要 封泥 1 個の印面の拓本に「簠齋藏古封泥」の朱印を押した 5～6 cm 四方の綿紙計 358 枚を、1 冊あたり約 60 枚ずつ、計 6 冊の冊子に 1 葉に 1 枚ずつ貼り込んだもの。文字は書かれていない。拓本は『封泥攷略』の巻一、三～七、十掲載の「簠齋藏古封泥」に対応するものが 355 枚、巻一掲載の「雙虞壺齋封泥」に対応するものが 1 枚あり、2 枚は『封泥攷略』未収品である。昭和 10 年(1935)に阿部房次郎氏により当館に寄贈された封泥と対比すると、当館所蔵封泥の拓本と認められるものが 348 枚あり、これには上記の『封泥攷略』に雙虞壺齋封泥とある 1 枚および『封泥攷略』未収の 2 枚が含まれる。拓本の順序は、『封泥攷略』の順序と対応する部分もあるが、全体としては雑然としてしている。また成冊以降若干の冊が失われた可能性も考えらえる。
- 購入金額 8,000,000 円
- 
- 31 ○種 別 東洋陶磁
○名 称 青花人物図面盆（せいかじんぶつずめんぼん）
○作 者 等 景德鎮窯「大明万暦年製」銘
○時 代 明時代・万暦年間(1573～1620)
○品 質 磁製
○員 数 1 口
○寸 法 等 高 8.4cm 37.4cm
○作品概要 硬質白磁胎。稜花形の折れ縁の盤で、平底とする。素地は分厚く、表面の透明釉がところどころ剥がれていわゆる「虫喰い」を生じている。コバルトで底を除く内外に文様を表す。
- 

見込み中央に配された高士と侍者の図が主文様であり、同様の高士と侍者の図が内壁や縁にも繰り返し配される。コバルトの発色はやや黒みを帯びている。底は中央を残して露胎、中央の施釉部分に二重円内を設けて「大明万暦年製」青花楷書銘を施す。

○購入金額 37,800,000 円